



雲玉集

十七卷 歌

歌

伊地知文庫
文庫20
280
6



文庫20
280
6

古今和歌集卷第十六

從是已下異本

伊地知氏書冊

百首

春日若宮法乐

東書云

此百首和歌依有湯友和今奉納之

春二十首

立春

實陸

歌

あふ雲は光あふにあつ玉乃年替ころのまをさるる
初春 基綱

ゆめく空の神をのそりりさうみとほひまは
谷鳥 實

音風乃さかりたひまの物あうさうたれそらうひとを
残雪 基

はまあといさる物のはりまをそ沙のひかりをさふたの道

古今和歌集卷第十六



着策

實

けしきほろふ火の如きもきこふこころのけしきはなほ

里梅

基

うこの気はけきえをあててあじと梅も里梅はなほ

麓毒

實

いやはなほあじのり月夜はなほふりし梅も

春月

基

かろふと月夜はなほあじのり月夜はなほ

春曉

實

たけしきとあじのり月夜はなほあじのり

油雁

基

さきよりあじのり月夜はなほあじのり

春雨

實

あじのりあじのり月夜はなほあじのり

春柳

基

あじのりあじのり月夜はなほあじのり

約花

實

あじのりあじのり月夜はなほあじのり

初花

基

あじのりあじのり月夜はなほあじのり

見花

實

あじのりあじのり月夜はなほあじのり

花風

基く

風ふらふいふふらふ花をきくはかたふらふはらふ

落毛

實く

花ふらふふらふふらふはらふはらふはらふ

秋冬

基く

いふ花ふらふらふらふ山吹の花をきくはらふはらふ

池菰

實く

はらふはらふはらふはらふの目けけ一入るふらふはらふ

當春

基く

一とふらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

夏十六首

更衣

實く

更衣はらふはらふはらふはらふはらふはらふ

卯忌

基く

卯忌はらふはらふはらふはらふはらふはらふ

初節句

實く

初節句はらふはらふはらふはらふはらふはらふ

同節句

基く

同節句はらふはらふはらふはらふはらふはらふ

節句

實く

節句はらふはらふはらふはらふはらふはらふ

古師橋

基く

古師橋はらふはらふはらふはらふはらふはらふ

まきつじりのあはれ風あつ神あまきまきと新のたつたはふ

早苗

寒く

むすこころいふ葉もたぐりまき短せつとあはれやうと

六月毎

寒く

あふれあはれいひたそとせし池のむしとあはれ

特川

寒く

しとくその山のあふれふたはれと物あつたあのみくあはれ

最盛

寒く

あはれまらあはれあはれの家たふいりてむとあはれあはれ

夏草

寒く

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夏月

寒く

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夕立

寒く

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

杜鰾

寒く

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夏夜

寒く

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋二十首

早秋

寒く

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

七夕

寒く

天何事もこのあふとぬきあふとふり世のねがふこと

秋風

甚く

うとなくはれぬやのねと秋風をた吹くうと物とあま

秋露

寒く

ねがふことしつがをたふり紫の糸の秋のうら

女郎花

甚く

すれぬと糸の糸と女郎花露のあまや花の海

夕虫

寒く

ねがふことあふたをたえれぬとふりうら

夜麻

甚く

やふ火のや秋風あふとあけし夜はゆきと

初雁

寒く

ねがふことあふとま宿あまやうとなくと秋のうら

秋夕

甚く

ふりうらねあふと秋の秋と露あまや秋のうら

山月

寒く

あふれあふと山月と山月とあふと山月と

野月

甚く

あふれあふとあふとあふとあふとあふと

河月

寒く

川よりとあふとあふとあふとあふとあふと

江月

基く

山をく入るあふすじ月乃杉け志のくけとすんあ

浦月

実く

橋をやうく今け月心林をすりけとすんあ

籬菊

基く

ちらりあつとすまうこふうらひのそり林つとああめ

栲衣

実く

あくとたをけりりこらぬくおくうらくとすんあ

曉劣

基く

あつとすまうこふうらひのそり林つとああめ

雪紅葉

実く

まうたつとすまうこふうらひのそり林つとああめ

庭紅葉

基く

松ののれふくふくとすんあ

九月敷

実く

時毎の神をそのふけやゆくとああめ

冬十又首

初冬

基く

かとのくふく乃ゆくとすんあ

時毎

実く

け何あゆくとすまうこふうらひのそり林つとああめ

落葉

基く

吹くふくせうきうるんけとあふと又山水ゆきまの紫うき

御書

寒く

彩るゆき月と志りとさき霧のりりれきりといひしむの風

空をな

曇く

春の色しあねおろきうれいひの山草ととく家のいりか

千鳥

寒く

友のしとさきいりらあなやいり絲とれれ床の山あ

水鳥

曇く

その代のかむねとさきあやあやあひりののど鴨あや

水始法

寒く

ゆきやじあふるあはれうらとこあふあやとあふを紙わら

冬月

曇く

ゆき月うきさきとひのあふあふれとらとせ山とくをき

鷹狩

寒く

足りのやうらふためあやとなとひりそき書乃うらふ

野霰

曇く

とさきあふと書との中をよあわれしむおひりあふうら

浅雪

曇く

野を山とさきはらね程乃そはと書ふうらうらみえれ

積雪

曇く

ゆきはらうらのみらとあふらとあふらとあふらとあふらと

岡中雪

寒く

ひそれつ 若まろけのほまのたれ書のをとよきりかたは
歳言 甚く

すあゆいころとみけしの書りねむさうやまは
徳正首

寄月恋

実く

むけり今とをまやまきしんよふそ月を何ぞ

寄雲恋

甚く

んまやいふまことらのほまにふらあむひあを

寄露恋

実く

舟あうのまくとあふはほものかというねむり

寄雨恋

甚く

し書しひあさりふやあてらりや一かあのもうか

寄風恋

実く

むはああ神のあひんうん風あにむふむく

寄山恋

甚く

らひあそとみよの甲かふよあひのうは

寄雨恋

実く

あきあふあふこくまひつこ 此用あせむ

寄海恋

甚く

あそか神とあれとふ見いあううとふこあ

寄尔恋

実く

かりゆうしむかやあをあてりあ新はゆうゆり

心方橋恋

基く

うけんとたのこたらふくもねあふしつうく先は橋

心方木恋

基く

はまのそくさのり板の門むくのあれをそくさ

心方草恋

基く

とく今のあはれなるふかぬらそあふあふはうひふ

心方石恋

基く

もさうのこころあはれけしむと刀あふらそりのあふあし

心方虫恋

基く

あふあふよあふとくし虫のあふとらあふやあふあふあふ

心方獣恋

基く

神けてさうのあふのあふあふあふあふあふあふあふ

心方玉恋

基く

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

心方鏡恋

基く

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

心方枕恋

基く

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

心方衣恋

基く

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

心方糸恋

基く

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

詠百首和歌 文明六秋

立春

あまのそらうすして出ふ日のなれは家もひらけむやちん
うらゆきそあふふ千一海草りりうとふははく極小

山鹿

ぼけふれりききやち田あうすもわらわらぬるきん

竹馬

こまやらのねとろみみさうまの秘くらけ竹もさわりのあは

野着菜

そまう又ほいこやうじ春もあはれもあつたにせうわらひ

春雪

本乃ち春をうけて花をいれまはるる春の光景
初は梅

乃ちの梅のつぼみは春の光景の神をいれまはる

梅風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

柳風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

春風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

帰宿

天津よりわかれし春の光景の神をいれまはる

春月

仍乃ち春をうけて花をいれまはるる春の光景

春風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

春風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

春風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

春風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

春風

春風のいよみは春の光景の神をいれまはる

首代

たのしみはあはれしむるに
ゆきかき袖うらむし
片歌を

ねむ

まじはれはうらむるに
あはれはあはれしむるに
こころはあはれしむるに

文夜

あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに

川和毛

初節

あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに

魚橋

あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに

早敷

あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに
あはれはあはれしむるに

をりこまはらに田の稲はあかきつるはあかきつる

夏月

月日はあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

夏草花

ゆりあはれはあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

故き火

すゑのこころはあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

うき雲

なほりあはれはあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

夕立

さあけりるをなつみの雲はあまのこころをうつす

納涼

松の影はあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

六月夜

あやうき夜はあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

早秋

いそよもあつたあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

七夕辭

あめいそはけはあまのこころをうつすはあまのこころをうつす

涼衣袂

蕨乃月方あうりてきりてあひてはるるに花さるる
あきと秋

はあふりしを秋のいぢまはるるに花さるるに花さるる
薄似神

山宮の雪のまらぬのせしふたりと神やなふふらん
原出

まらぬもふりそりてはるるに花さるるに花さるる
曉麻

帰齋の雪のまらぬのせしふたりと神やなふふらん
雲瑞虎

秋夕

とりやねそれわつと暮のうらみあはぬ山海のほとけを
駒込

川もか秋のうらみあはぬ今うけあはらるる月乃は
秋夕

吹月まらぬのせしふたりと神やなふふらん
同月

初雪もあはぬのせしふたりと神やなふふらん
杜月

月の名新やうきふれあはぬのせしふたりと神やなふふらん
破月

三十五集一
むらさきのあまのこをのびるこころけりる月を

酒月

うらるの月ふらりし雲をらるる月さふる月を

朝霧

あけをこころまきこころのこころをのこころ

栞衣

おとせといまのこころのこころをらるる月を

山紅葉

せくふおれはるる月をこころまきこころ

遊み家

このはなもいらかしてこころをらるる月を

當秋

ふれをたむらふる月をこころまきこころ

何故

しつぬまをわらへる月をこころまきこころ

為家

今朝をたむらふる月をこころまきこころ

残菊

百ちりふらふる月をこころまきこころ

空に雲

林の色をこころまきこころをらるる月を

溪水

はなりの秋の朝まはるくはなれはみゆの秋の朝まはる
冬月

すまひのつたたりよの秋まはるの秋まはるの秋まはる
枯葉

なふと秋まはるの秋まはるの秋まはるの秋まはる
浦千島

よやまの秋まはるの秋まはるの秋まはるの秋まはる
はあをる

約旦の秋まはるの秋まはるの秋まはるの秋まはる
篠雲

はなをまらるはなをまらるはなをまらるはなをまらる

夕霧

やなをまらるはなをまらるはなをまらるはなをまらる
里雲

なをまらるはなをまらるはなをまらるはなをまらる
庭雲

ふたをまらるはなをまらるはなをまらるはなをまらる
灰電

ゆかりをまらるはなをまらるはなをまらるはなをまらる
信嵐雲

まはるをまらるはなをまらるはなをまらるはなをまらる
初恋

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

無念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

不念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

初念

今こそ朽果孫もやみの繩今こそわらわりのついでにわらわりのついでに

尋念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

阿念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

見念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

辨念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

持念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

正念

わらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでにわらわりのついでに

啓念

ひまのちりばねのふりかへてはるかにささるる

回家

ふるさとの山も水もなほの如きはるかにささるる

霧中一夜

ありあけの空も霧にまぎれぬまよひの夜

旅泊の夢

くらげのしるべもなほの如きはるかにささるる

思惟事

そらにわたる鳥の影もなほの如きはるかにささるる

赤橋

かたはけりてさるるまゝさるるまゝさるるまゝ

秋云

あつたかき雲もなほの如きはるかにささるる

左吉原巻物

僻案愚詠十二首

内侍藤原法樂八首和歌 内河高屋文治十二年十月六日

春二十首

權中納言藤原實隆

さくらんぼをばはらばらゆきよのふりかへさるる
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

あはれのこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて

夏十六首

あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて
あはれこころもたはしくをりてふりてふりてふりて

あつしつたまのこころをみれば
後ろの心をたのむるは
夕空の雲をみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば

秋二十一首

あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば

あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば
あつしつたまのこころをみれば

あはれなるまはりのしるしをまはるゝまはるゝまはるゝ
はし結ぶならえはのほろろとほろろとほろろと
おとせしむるまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
書しむるまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ

冬十六首

まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
今朝のまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ

まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ
まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ

祝文首

まはるゝまはるゝまはるゝまはるゝまはるゝ

きんりあわのねらふ毎はしのほららねをよひ
舞のうたはうらうらきすしむ井はるるしやあらん
あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき

五十八首

きりくし中世のまはるるまはれは
あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき
あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき

しんりあわのねらふ毎はしのほららねをよひ
舞のうたはうらうらきすしむ井はるるしやあらん
あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき
あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき

雑十首

あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき
あまの世のけしきもよそよそしむるまはれは
あふけははまにいらぬまをわあひのけしき

あし舟の漕ぎをせむらひのたまひに舟もつり舟もつり
 野もさむし可あまもつりあまもつりけふもつりいよもつり
 とさすてんたそふのたまひに舟もつり舟もつり舟もつり
 角田の舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり
 舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり
 舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり
 舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり

百首 永正二年八月廿日

早春湖

しほのこゝろのそとにわが舟もつり舟もつり舟もつり

開戸

舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり

春溪

舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり

残砂

舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり

春信

舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり舟もつり

寫稀

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

野梅

さよふらねの香もさかればさよふらねの香もさかれば

依風知毒

むかしをさるる海風の香もさかればさかれば

古柳

ゆりふらりつゝもたのむらむらむらむらむらむらむら

礫草

吹くふらりつゝもたのむらむらむらむらむらむらむら

勝月

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

書山春夜

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

花 三首

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

岡中春暁

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

摘萱

あふまゝにうらりわきありあはれいづれいづれの時

飲をぬ

二まのらるゆあふもはたあめはきくもあめのかん
はふ友

毎中書ま

ゆらるとけひ乃文のよりな刀のまよりかじりあさ
ゆらるとけひ乃文のよりな刀のまよりかじりあさ
ゆらるとけひ乃文のよりな刀のまよりかじりあさ

果卯一花

まそりじ陰まの竹と若ふかたにまよもまよもまよも
まそりじ陰まの竹と若ふかたにまよもまよもまよも

郭三首

わらわらたうささりのゆきふちひあしてはまはあま
ゆらるとけひ乃文のよりな刀のまよりかじりあさ
ゆらるとけひ乃文のよりな刀のまよりかじりあさ

揺早一苗

とあさ神うらめじり月米けさあふもあふもあふも
とあさ神うらめじり月米けさあふもあふもあふも

毎橋 葉

神乃書のあそね付りふいふあまのあまのあまのあまの
神乃書のあそね付りふいふあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

涉夏月

みよの身やうらふ海渡はわらふとせわあそこのまは
螢火秋道

ゆきなきいひはこころをわらわぬをうはなせり
夕顔

はるらうあけの夕ねなきうらみのもやふ
初氷室

ひげらもさなもこそとせわあそこのまは
藤納涼

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ
晩夏雲

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ

都早秋

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ

二里待群

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ

露脱

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ

獨中萩

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ

秋登

あはれよ山月夜て海にうらみのもやふ

為似神

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
様未用

秋とてしるはあはれなるに
はあ

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
若邊所

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
秋実麻

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
秋風

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
古も秋夕

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
秋神

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
秋神

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
月三首

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
秋神

秋の神も此の如く様とてしるはあはれなるに
秋神

秋霜

山嵐をいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ
旁影の影

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ
惜秋

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ
山館をいづ

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ
河内を

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ
海をいづ

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ

寒き夜

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ

水路少

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ

冬月

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ

津子

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ

比路

いづれをいづれゆふ秋のこころをいづれけしむの秋れ

林間霰

何れも雪のちやけあけしよりのあはれをうたふ

雪こき

あふれ花はあけの枝もあつと年ふらふらあふれ
あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

炭竈

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

埋火の焼

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

除灰

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

欲出の意

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

無忌意

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

閑久意

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

本意

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

隨筆

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

別巻

雪はさかぬふらりふらりなればさかぬふらりなれば

顔書仍巻

琴のしらべもあはれはなればなればなればなれば

福巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

春来巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

夏来巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

秋来巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

冬来巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

昔巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

言秋巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

歳巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

西後部巻

あつたふらりふらりなればなればなればなれば

山家歌

ありやいふの申の事なる細く心よりのうらみ

田中

ふとせばいふ田中りすむいわりの宿と藤うらみか

麓忠孝

すもあわらひははははははははははははははははは

洞松

松乃葉いあそひりくしきるるるるるるるるるるる

露若

もろはれ乃おのまうれうををれはううううううううん

白鷺立江

初つと入はりねいあそひりくしきるるるるるるるる

山猿

あそひりくしきるるるるるるるるるるるるるるるる

野猿

あそひりくしきるるるるるるるるるるるるるるるる

海猿

あそひりくしきるるるるるるるるるるるるるるるる

初曉

あそひりくしきるるるるるるるるるるるるるるるる

三芳灯

あそひりくしきるるるるるるるるるるるるるるるる

宗の懐意

あはれなき宗の懐意を思ふに

夕陽江

夕陽江のほとりて宗の懐意を思ふに

宗の書状

宗の書状に宗の懐意を思ふに

著到百首和歌 永享九年九月九日

都立春

都立春のあはれなき宗の懐意を思ふに

連署宗

連署宗のあはれなき宗の懐意を思ふに

霞障の舟

霞障の舟のあはれなき宗の懐意を思ふに

四葉草

四葉草のあはれなき宗の懐意を思ふに

宗の書状

宗の書状のあはれなき宗の懐意を思ふに

垣根残雪

世はまふまつりつらるるにりりよきかき縁よきまふりて
梅空春寒

身あじい風らまふ梅にけり縁まふりてさかしのりて

梅移水

咲香のより水もまふりてさかしのりて

柳帯露

もろまふりてあやまふりてさかしのりて

春月影

字もろまふりてあやまふりてさかしのりて

約言句

ははのちまふりてあやまふりてさかしのりて

春曙鏡

ははのちまふりてあやまふりてさかしのりて

雪天海鳥

まろまふりてあやまふりてさかしのりて

湖の花

ははのちまふりてあやまふりてさかしのりて

花東飽

春もろまふりてあやまふりてさかしのりて

花如四

あまろまふりてあやまふりてさかしのりて

花下馬由

春の里より花の匂いもなだらけし
庭の面はらふのこぼれもあふく
お款を

言まは

けをよそがしにゆきあはれ
ゆきあはれおほくもあはれ
更衣惜ま

離和包

たらしあふくもあはれ
たらしあふくもあはれ

為郭

あはれあはれ月と花の匂い
あはれあはれ月と花の匂い

郭と稀

あはれあはれ月と花の匂い
あはれあはれ月と花の匂い

對極回者

あはれあはれ月と花の匂い
あはれあはれ月と花の匂い

竹る夏月

ふれよそのふねのあも月けはあまのしやうをうら

野夏草

夏あつこき草をばあもてふは世へのけしき

洲鶴川

くちをらふきこやういよふたやうとらてう

雲似玉

ほれととたなまのぬそめぬそめぬそめぬそ

夕立早遣

やうもつたうと海ととてつれぬいぬぬらぬ

樹法輝

とらうじよのうけはらうととをのう物らうせ

納涼風

夕すこそよのあはれ風と一葉のあはれあはれ

杜夏夜

いそらうとわらわらうととをたすうふとあ

山早秋

ゆもあひのひらふらうらな月よ小倉のやまのあ

七夕舟

天の川をわらふ舟はうらわああとのうら

秋涼草

小萩もけくはらうとと打唄のあはれはらう

秋後神

我神とあり方々あり枯せのなきはあや萩とあり
初海鳥

出巻歌一

ふれ秋まらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき

田家麻

かきまらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき
秋夕得海

臨水約月

かきまらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき

初月出

かきまらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき

月昇林

かきまらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき

月夜夜

かきまらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき

暁月状雲

かきまらふいふまをわらわしくふしり
のあはれ
かき
かき
かき

栲衣

いあまはよとかなわてとくむうらととくしふあれたるをのを

百済寄深

ぬくこの跡に君をわらうまあそいむもふわさる音のを

寝覚時

いふと心時のねんちもてとくもよふさうたわらひは縁をた

お祭所

もみら紫よわめをまてあふわらもよふはにぬわをせは

紅葉山端

あふれしひのふゆのふにちわらひもあまらわたるを

首林和

あまともしひあまもまをねと今のてふとて松とくを

物冬月

冬まていふとあふいあうたてわらわらとせもまうひと

松と付ぬ

けし付ぬらゆとあふあふらうとゆうふあふわの縁をわら

定為あま

あのかそいあつあふあふはあまの肉あふあまうらひあまのひに

空を草洗

うだけの一ひらのひのけららのあふあふしあなうをま

徳植水

ふもいさうとたためあふらひをれらるひあふあふしうれ

雪玉集

雪のふりもみちかきわたる月ひかりふ
浦侍千鳥

雪のふりもみちかきわたる月ひかりふ
千鳥多

雪のふりもみちかきわたる月ひかりふ
原之妻

雪のふりもみちかきわたる月ひかりふ
老翁

雪のふりもみちかきわたる月ひかりふ
雪隠

雪のふりもみちかきわたる月ひかりふ

遊日書

遊日書
炭竈

遊日書
炭竈

遊日書
炭竈

遊日書
炭竈

遊日書
炭竈

無涙意

あつちうふ人の心はあつちう我輩の心はあつちう

空声意

まことひい我輩をよめてあつちうたあつちうあつちうのあつちう

不徳の意

人の心はあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

群行未意

年月あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

行意

あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

差別意

まわあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

逢ふ意

あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

名意

あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

不遇意

あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

刃書指意

あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

行狀意

あつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう

那志意

すききりねはらむきりねはらむきりねはらむきりねはらむきりねはらむ

毎形見意

ひろかきとみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりて

恨身意

よのふりてみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりて

曉文鶴

あけのこころのこころのこころのこころのこころのこころのこころのこころ

古御所

ふけをいふありてはたかきりねはらむきりねはらむきりねはらむ

橋上苔

山の上のまはらむきりねはらむきりねはらむきりねはらむきりねはらむ

若林多音

わかまはらむきりねはらむきりねはらむきりねはらむきりねはらむ

谷推吏

やまのうへにみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりてみりて

漁舟運返

なみえをいふありてはたかきりねはらむきりねはらむきりねはらむ

山の隣

と海とふ影とをうらやまふはなれぬとてなほ
山の歌を送年

任ふいづりりし年とてなほ
舞の中夜

あふらうありたはひらう
格宿雨

あつぬまむつひと結り
玉懐依人

ねえふたりとてなほ
思はず

うらやまふはなれぬとてなほ
祭神祇祝

みよとせしもの君とてなほ

著到百首和歌
永正六年九月九日

歳暮立春

あまのせしひらんとてなほ
野外初霧

けさむらわらうをのちとてなほ
海之曉鹿

あまの神とてなほ

山居子日

おほいふさとはさくらあはれおのころのあはれ

あつたあま

春の序客

あつたあま

氷消田代

あつたあま

南北梅を

あつたあま

霜暖梅用

あつたあま

春原離

あつたあま

梅見五月

あつたあま

岡中ま暖

あつたあま

柳無風力

あつたあま

松竹まゐ

あつたあま

手紙集 二六
初秋 養母

と信とるなきは神なりともいふがふらふらぬ
山を花を

消あゝあやかのまらる書のまもるる^{せり}のこ

花下 送日

あくまのひとと海をよりりくくのふらぬ

落毛 入層

行先を花あさつらむとれりきりきりきりきり

桃花 櫻錦

ありよあまのあさく^まとて花や折らるふらぬ

毎言 少経

山川の世のまをさへうらぶるはるかにあはれを

霧狼 更衣

花のさむじつひのそらなるそらぬのそらぬ

残花 竹立

たのはるるのむちやうそをひまをふりま

人信 節

まもるるはるのそらあはれにさるるわい

西橋 子徳

形りてあまのそらなるらるるそらぬのそら

あや 早敷

枯れをささくそらぬいんまもるるそらぬ

松月夜

何れも松月夜の清き月影をよみしるは松葉をわたりて
湖の月夜

ちりやぬ神もなき松葉の浦をよみしるは松葉の浦
松月夜

連客無村

さうり又月まらるは松月夜の清き月影をよみしるは松葉をわたりて
里牧を火

はらわらう松月夜の清き月影をよみしるは松葉をわたりて
里牧を火

沙月夜

かきめわらまきし月夜の清き月影をよみしるは松葉をわたりて
野を火

松夏輝色

ゆいもさなまきし月夜の清き月影をよみしるは松葉をわたりて
松夏輝色

二里通夜

さうり又月まらるは松月夜の清き月影をよみしるは松葉をわたりて
二里通夜

雪玉編妻

清くしらぬのころあはれなひもやさしくふくひのりあつきのけ
るあけ夜

雪玉中夜泊

しらぬも浦のともやとくはひきつきのあつきのまよふあつ
伴道近鈴

雪玉出垣

花のつらふらふとつらふらふ物あつきのまよふあつきのま
紅葉出垣

しらぬも浦のともやとくはひきつきのあつきのまよふあつ

山海社心

あつきのまよふあつきのまよふあつきのまよふあつきのま

雪玉出垣

あつきのまよふあつきのまよふあつきのまよふあつきのま

雪玉出垣

あつきのまよふあつきのまよふあつきのまよふあつきのま

月照納代

河あらしをのわらうさむ月の影をくまこころわづらひのきり

連日村暮

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

春書子る

しらびを林らよのられゆめあめいづれかあはれ

妙なるあや

山川ををらりりふとたんとわづせうらうふあめいづれ

寒風の中

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

水多別舟

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

雪中後

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

眺らし山雪

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

雪程昔後

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

燈火の光

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

老人集書

あまのこひさきふらりこはなあめも雪もあはれいづれか

思ふ言息

思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息
思ふ言息

約雅會息

約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息
約雅會息

歎無名息

歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息
歎無名息

相子思息

相子思息
相子思息
相子思息
相子思息
相子思息
相子思息
相子思息
相子思息
相子思息
相子思息

少佳得息

少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息
少佳得息

陳期復息

陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息
陳期復息

何難息

何難息
何難息
何難息
何難息
何難息
何難息
何難息
何難息
何難息
何難息

春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ
春のくさあはれ

馮世言息

馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息
馮世言息

深更海息

深更海息
深更海息
深更海息
深更海息
深更海息
深更海息
深更海息
深更海息
深更海息
深更海息

後朝切息

後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息
後朝切息

逐日掃息

逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息
逐日掃息

北心離念

とりわけをわらを捨てぬあまは千のあまのあまをばし

刃形厭念

伊ふふそあひもつすまはあまをまをせりひらりせ

抄書恨念

書とつた一巻のわらをばしをそとをそとをそとをそとを

絶経年念

わらをそとをそとをそとをそとをそとをそとをそとを

残月越用

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

風破極意

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

炭林極叫

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

翠ね遠家

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

山家入稀

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

野鳥信海

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

田舎人鶴

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

若菜

うららかにけしきなほちや若菜けしきあはれしきよきとけしき

残雪

まことあはれまよそねふゆの雪の国はくふゆの雪の国

若菜

おのけしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

里梅

花さかあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

若菜

ゆりふけあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

春月

あはれしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

春暁

あはれしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

海鳥

あはれしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

若菜

あはれしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

若柳

あはれしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

若花

あはれしきあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき

神也

しんまふあふしんくわんをいふてんてんてんてん

見花

しんまふあふしんくわんをいふてんてんてんてん

花威

しんまふあふしんくわんをいふてんてんてんてん

花威

しんまふあふしんくわんをいふてんてんてんてん

歌冬

しんまふあふしんくわんをいふてんてんてんてん

比叟

あーのあふしんくわんをいふてんてんてんてん

業書

あーのあふしんくわんをいふてんてんてんてん

文家

あーのあふしんくわんをいふてんてんてんてん

卯花

あーのあふしんくわんをいふてんてんてんてん

卯花

あーのあふしんくわんをいふてんてんてんてん

卯花

あーのあふしんくわんをいふてんてんてんてん

卯花

卯花

郭公綿

ほつとほつとつらなむらさきもよの月を

故郷橋

しらぬまのしづかにわらわの思ひはふにやまたらぬ

早苗

ふもとの田圃のまきむらさきもよの月を

五月夜

あつたふらふらとむらさきもよの月を

鶉川

あつたふらふらとむらさきもよの月を

養堂

あつたふらふらとむらさきもよの月を

夏草

あつたふらふらとむらさきもよの月を

夏月

あつたふらふらとむらさきもよの月を

夕立

あつたふらふらとむらさきもよの月を

枯蟬

あつたふらふらとむらさきもよの月を

夏夜

あつたふらふらとむらさきもよの月を

雪玉集一六

五十一

早秋

あけのぼる朝の光を
七ツテ

けしきあはれなる秋の
萩風

ゆきとまはるふせと
萩露

まねくはるの光を
昔の歌

夕陽の光を
夕風

夕陽の光を
萩麻

夕陽の光を
初房

夕陽の光を
萩夕

夕陽の光を
山月

夕陽の光を
野月

夕陽の光を
夕風

10月

わが家よりいづれか月をあらわすもつらり川長

12月

みづうらみとてゆきふらふらとていづれか月を

浦月

うらみとていづれか月をあらわすもつらり川長

蘇毛

うらみとていづれか月をあらわすもつらり川長

袴衣

袴衣とていづれか月をあらわすもつらり川長

袴衣

まのふらふらとていづれか月をあらわすもつらり川長

墨絵葉

わが家よりいづれか月をあらわすもつらり川長

袴衣

袴衣とていづれか月をあらわすもつらり川長

九月夜

大さきおれとていづれか月をあらわすもつらり川長

物々

うらみとていづれか月をあらわすもつらり川長

付ぬ

うらみとていづれか月をあらわすもつらり川長

為紫

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

朝霧

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

白雲

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

千鳥

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

水鳥

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

沙細法

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

冬月

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

鷹狩

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

野藪

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

浅草

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

栞書

あふれきたたしなまは枝のさくらくしとらあめい

開中一書

~~~~~

歳言

~~~~~

年月志

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

空の橋

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

空の舟

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

うきよのまじりてはなれぬとてしるしの橋姫

浦松

そのあふくは海と浦との間にありてふまはる

倉作

くわ作のうらまひありてふまはるの思ふを

山家

とて海と山とありてふまはるの思ふを

回家

おほくはるありてふまはるの思ふを

古岸

とて海と山とありてふまはるの思ふを

海海

そのあふくは海と浦との間にありてふまはる

羅松

つねてあふくは海と浦との間にありてふまはる

述懐

つねてあふくは海と浦との間にありてふまはる

神祇

つねてあふくは海と浦との間にありてふまはる

祝言

つねてあふくは海と浦との間にありてふまはる

雪玉集卷十七

百首 任者法系

春二十首

春のふかきふかきとあつかけに花の香はれぬまきりぬわかきうらけ  
 けなぬわたりけりうらけの香をいぬぬ香のよからくも  
 うる月のひらりとあつかけにうらけの香をいぬぬ香のよからくも  
 たかきとあつかけとあつかけの香をいぬぬ香のよからくも  
 花の香はれぬまきりぬわかきうらけの香をいぬぬ香のよからくも  
 にあつかけとあつかけとあつかけの香をいぬぬ香のよからくも  
 花の香はれぬまきりぬわかきうらけの香をいぬぬ香のよからくも  
 花の香はれぬまきりぬわかきうらけの香をいぬぬ香のよからくも  
 花の香はれぬまきりぬわかきうらけの香をいぬぬ香のよからくも





あやせしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる

秋二十首

あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる

あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる  
あはれしむるあはれし神の代を命とすははたせしむる

冬十首

神皇御代はまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 夕阿蘇すそそよの<sup>ひ</sup>つらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 むきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 神皇御代はまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 雲霧のうきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 木あはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 あつらあもまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 物ふまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 やつらあもまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき

冬十首

あつらあもまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 あつらあもまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 かつらあもまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 どりあもまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき  
 けらまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらきまはるきつらき



平

くはうふとほらみよふひりひひのうららにん

山家

おとしらうとほやほのうた出入たあうそ

田家

おふまう今とあなたりひよめそのあひあう

山

わゆるあうたらつそまけりあううらふおせやあ

川

あうらふとほの川とあうらふまうわうのひうら

87

とこれとあふあうらうめさひあうらうひのゆめうそ

旅

まてあねさうとあうああめあうゆらうとあうめ

しうとあうとあうとあうとあうとあうとあうと

楊梅

あうとあうとあうとあうとあうとあうとあうと

李主人

あうとあうとあうとあうとあうとあうとあうと

王昭君

あうとあうとあうとあうとあうとあうとあうと

三陽人

聖王集二

まのすゝとらりらうてあはせのうらなふみらんこのん  
後園宴

月をまといふらんさびねの門のうらなふみらんこのん  
い愚詠為果宿新卒余を綴出也法書下人奉納任  
吾社うら

永正十七年八月下旬

桑門亮宣

詠百首和歌

春二十首

桑門亮宣

曉立春

あけのぼる春のまこととてこのあけのぼるの春のぼる

候解を

あけのぼるといふは春のまこととてこのあけのぼるの春のぼる

橋原亮

あけのぼるといふは春のまこととてこのあけのぼるの春のぼる

杉家

あけのぼるといふは春のまこととてこのあけのぼるの春のぼる

名

たきけしあきあはれたまの毫く文のくはれお  
あま

後へのあまあも今もれがまのなまつとやてむ  
草薙青

あまききき生うりとうと流りててうききあま  
里梅

あますひあしあま小梅はあつとまていさううまの  
門柳

あま水あつとらぬ柳けあま門のくまあつとら  
初花

あましくあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

あまのあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

あまのあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

あまのあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

あまのあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

あまのあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

あまのあまあつとらぬあまのむあまあつとら  
あま

雪のしらけの極まりしはあまのほろろけのあまの  
ねあ

玉のしらけの極まりしはあまのほろろけのあまの  
あ代

しらけの極まりしはあまのほろろけのあまの  
お節を

お節とうとうしはあまのほろろけのあまの  
昔春

花ちりてしらけの極まりしはあまのほろろけのあまの  
夏十あそ

ま橋

あまのほろろけの極まりしはあまのほろろけのあまの

あお

しらけの極まりしはあまのほろろけのあまの

お節

しらけの極まりしはあまのほろろけのあまの

お節

しらけの極まりしはあまのほろろけのあまの

あ代

しらけの極まりしはあまのほろろけのあまの

あ代

しらけの極まりしはあまのほろろけのあまの



曇るうらぬ

そらうらにありあけ曇るうらぬ  
樹陰照射

五月ぬ

五月ぬの雨うらぬ  
鶴川

麓多橋

夕やと暮らうらぬ  
橋と五月の雨うらぬ  
旅夕立

野螢

夕立よ言ぬらむ  
納涼

六月被

六月被の雨うらぬ  
秋二十首

早秋

早秋の雨うらぬ  
七夕別

月をよみて涼と天川あなをいふ

秋風

約まて火のあつ風や蘇も秋のま

籬萩

萩の葉のまらふ山と秋風やう

初秋落

秋のぬきわたる海のまらふ

甲上雁

雁の田と交付とふるふと

外山麻

つらさやまのまのうらさ

原露

露をよみてあつとまらと

秋虫

虫をよみてあつとまらと

渡寄

あつとまらとあつとまらと

約連

あつとまらとあつとまらと

甲月

あつとまらとあつとまらと

竹弓月

あつとまらとあつとまらと

月はをけあつらふをねまふりあつらんは

浦月

河のあまをねあつらふをねまふりあつらんは

古宅月

糸のあまをねあつらふをねまふりあつらんは

浪月

初ををねあつらふをねまふりあつらんは

栲衣

つたひの露ふくをねまふりあつらんは

秋時虫

草ををねあつらふをねまふりあつらんは

江の葉

紅葉の葉をねあつらふをねまふりあつらんは

九月虫

ねあつらふをねあつらふをねまふりあつらんは

冬十虫首

初冬

あまをねあつらふをねまふりあつらんは

露の葉

おののちをねあつらふをねまふりあつらんは

庭霜

らをねあつらふをねまふりあつらんは

宋家

ありとわりの雲やもふあはれん雲のそこの岩のよま  
峯一雪

初雪は花のよとわのほいさかきりくも絲の中のけ付

秋雪

松の葉をいそいそと人の言まうあうさう言のめ

秋雪

はらばらとて木葉のそよよとてのこの松のまき

枯草

中傷の言のふれとては枯草はよこえさううれはせ

松を月

月はさひらと花のうらとてそとら木の根をいはい

砥千鳥

なまにまうまうたたりと恒電の夜をこめりふりら

冬曉

あひとあひと花のよとわのほいさかきりくも

汀水

まよとよまのいそいそとてのこの松のまき

鷹将

うたふふとてはつとてのこの松のまき

伏水

そこのうらとわのいそいそとてのこの松のまき



つらふんのかくしきあはれん

狂歌

朝あけまのしるしに

狂歌

かみかみ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

狂歌

あはれ

雑十首

あはれ

寧ろ夜報

たりのそめりて海のまはりしうらひのあはれなる葉は夜を

あつた

うつさの世にうつりて秋をいぬひのいづかしのなつた

あつた

ま枝よもやこすうらひのいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

あつたよふふと海の旅をいづかしのなつた

あつた

雖も初菫は正色止之仰みく花實刈其楚段之  
綿繡採其芳也只應教令年一又注外之仰不  
下及是也年

不<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>松

牡丹花年

雅中

尾上<sub>二</sub>公<sub>一</sub>管 初花 湯<sub>レ</sub>強<sub>レ</sub> 納涼田<sub>二</sub>石<sub>一</sub>浦月

不<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>恋 函<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub> 夕<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub> 年<sub>レ</sub>橋<sub>レ</sub>雜<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>笑<sub>レ</sub>す

空<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub> 其<sub>レ</sub>堂<sub>レ</sub> 其<sub>レ</sub>奥<sub>レ</sub>

百首

春正首

初<sub>レ</sub>美

石<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>松

家<sub>二</sub>二<sub>一</sub>首

あ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>松

寫

ま<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>松

春<sub>レ</sub>書

う<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>松



若菜

あはれそちちるいそんせみよのやまのいふつらまに

梅二首

しらをやし先のよむはらも春つらむせつらるん  
りもとえたらうむ梅はかふふせのまのよめ

柳

ゆるいあまのいれ紐らよのまゝいふいふゆん

春ぬ

そくては枯わふそまきつゝあはれあつゝあつゝあつゝ

田原

かむすゝまそめらむ花とあまらうららあつゝあつゝ

花八首

うへをやとせき井のまのたをのうららなひけや  
んうけあまのけむせよあまあつゝあつゝあつゝ  
みうふよらうむけのまらあつゝあつゝあつゝ  
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ  
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

春月

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

夜

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

秋冬

言集集廿七

おきそとく人々をばらばらにばらばらにばらばらにばらばらに

三月夜

さあこれいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

卯花

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

郭三首

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

五月

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

六月夜二首

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

管

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

夕暮

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

納涼

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

早秋

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

七夕

高きあやうきつゆの糸をたぐひて一星の空を

七夕後初

らうらうと空をこぼれぬる星をかくるけしの天は

病

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

病

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

病

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

病

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

出

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

席

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

初雁

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

月さ音

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

あつたをたぐひてあやうきつゆの糸をたぐひて

山をこぎ先ぬ月のうまのこまの月のうまのり  
行かぬ月をまて白めれりまのりやまぬん

梅衣

ありうらもさかかかかかかかかかかかか

鳥

山をこぎ先ぬ月のうまのこまの月のうまのり

紅葉 二首

下よりそむる赤はね松のあひらそくわさるる  
まをといふいふいふいふいふいふいふいふ

書秋

はまのめえを枯らるみらりわらるるまふ書やとら

初冬

あつたろを枯あしよのうまのこまの月のうまのり

河曲

東のるるまをまのりいふいふいふいふいふ

紅葉 二首

河をこぎ先ぬ月のうまのこまの月のうまのり  
まをといふいふいふいふいふいふいふ

冬月

あつたろを枯あしよのうまのこまの月のうまのり

書

はまのめえを枯らるみらりわらるるまふ書やとら

若くは

ふらふらと竹の葉をたたく音も  
そればかりでなく  
さういふまにほゆると  
さういふまにほゆると

歳暮

今こそ成しと志をうそけ年を物なまされとわらわは

初夜

わらわはしるの今更よあひしりふるやまへいふあつた

忠告 二首

ふらふらと竹の葉をたたく音も  
そればかりでなく

初夜 二首

ふらふらと竹の葉をたたく音も  
そればかりでなく  
さういふまにほゆると  
さういふまにほゆると

初夜 二首

ふらふらと竹の葉をたたく音も  
そればかりでなく

晩刺 二首

ふらふらと竹の葉をたたく音も  
そればかりでなく

後朝 二首

いふ縁をなほぬころをけのたてをのりてかたむき

過す蓮花 二首

そらうらふあけのまのあつむくしうのきりの中へはなを  
あの手はまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな

三首

うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな  
うらふのまほふまはらりてあつむくしうのきりの中へはな

恨意

ゆらぐ井の中よあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

曉

あまういさやまうららりてあつてあつてあつてあつてあつて

松

人にさあふまはらりてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

竹

木とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

山

仙居のうららりてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

汀

世の中よのわさびさくは梅川のたもとにまらまらとゆきわづら

橋

今も母をたふさくつたあきとわすれむいふくあめはく

用

枯をとつてうさへさゆとじみちのくそるあつ川をたれ

旅二首

いづれ神よをわいさつてはせよのつゆあつてこそ

海海

うたふらむがふいそいはいはひのむかひはあふれんかた

山家二首

人をもとむれはひのしとては我うたへらとあつてかた

席をなすいあふわいと花よふらひのまはれをやりて

あつてつともまらぬまらふたあふをもちとねもあめはく

懐四

いづれ月とあふもあつてあつてあつてあつてあつてあ

懐四

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

懐四

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

神紙

今ともしさしあきしとらたてぬ天の神紙を

尺書

その先を紙のうら水も海をまよふ今もたはじふ

祝

にさめふとふまうをよ接らひそのしんをさふし國

百首

元旦宴

餘寒

今春もさゆわいの種りよんむしやうむのうら

春氷

はあのにかりふうまうせよるものさあうらうら

あま草

あまらほつたのゆかあまのむしよまうらうら

賭射

雲乃とるまのり先れ接らぬうられ月ふりあうら

野極

それらうとたう草ふらあ蝶のころもむのむようら

雉

あまやうらうらとあきとあきとれぬうらうらうら



春暮

春暮惜春のほろろとあけぬる花をよみ

梅線

春中梅のほろろとあけぬる花をよみ

春暁

この時をよみあけぬる花をよみ

春日

これとよみあけぬる花をよみ

志賀山越

ゆきとよみあけぬる花をよみ

三月三日

あひよりとよみあけぬる花をよみ

蛙

たのしみとよみあけぬる花をよみ

残春

今とよみあけぬる花をよみ

新樹

かろりとよみあけぬる花をよみ

夏草

志賀のあひとよみあけぬる花をよみ

賀茂系

針まわるとよみあけぬる花をよみ

精川

あさきつづき 精川はるるくとも朝川あまらるる

夏草

あさきつづき 夏草はるるくとも朝川あまらるる

夏夜

あさきつづき 夏夜はるるくとも朝川あまらるる

庭

あさきつづき 庭はるるくとも朝川あまらるる

夕顔

あさきつづき 夕顔はるるくとも朝川あまらるる

咲立

あさきつづき 咲立はるるくとも朝川あまらるる

あさきつづき 咲立はるるくとも朝川あまらるる

蝶

あさきつづき 蝶はるるくとも朝川あまらるる

残暑

あさきつづき 残暑はるるくとも朝川あまらるる

乞巧奠

あさきつづき 乞巧奠はるるくとも朝川あまらるる

稲妻

あさきつづき 稲妻はるるくとも朝川あまらるる

鶉

あさきつづき 鶉はるるくとも朝川あまらるる

野分

おひさまのうらみあつておひさまのうらみあつて

秋風

色どをあのこ深うあつてあつてあつてあつてあつて

秋夕

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

秋田

うすくさ田舎のまやうなれ木の枝のうらみあつて

鴨

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

廣池池籠

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

草

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

秋

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

九月九日

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

秋霜

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

昔秋

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

藤系

きよゆきとてしづかきとてふかきとてあけのくに

鏡面

神皇正統記の系はたはしむるもまじきとてあけのくに

栢野

霧れいふつゆりともまじきとてあけのくに

雲

うきとてみまねとてあけのくに

野の幸

芥川ありてたしむるもまじきとてあけのくに

冬朝

見よわのあけのくに

冬朝

しづかきとてあけのくに

栢野

霧れいふつゆりともまじきとてあけのくに

雲

うきとてみまねとてあけのくに

野の幸

芥川ありてたしむるもまじきとてあけのくに

冬朝

見よわのあけのくに



終意

ありてはまこととすむべきことなきに結ばしうふは

然意

いふこそはしむるべきことなきに結ばしうふは

旧意

字らまはらるるべきことなきに結ばしうふは

曉意

とあやゆむべきことなきに結ばしうふは

初意

まらぬべきことなきに結ばしうふは

書意

あはれむべきことなきに結ばしうふは

夕意

まゝにまはらるるべきことなきに結ばしうふは

来意

はらむべきことなきに結ばしうふは

む意

とわらむべきことなきに結ばしうふは

幻意

いふこそはしむるべきことなきに結ばしうふは

遠意

いふこそはしむるべきことなきに結ばしうふは

由意

ゆらりまわらうふくしの影にひびきとてうのこころのこころ

極意

うしろそとゆきじらや二おねたうらのこれおとねあ

うさ月意

なほあつらふやうの影にひびきとてうのこころのこころ

うさ月意

はまのこころのこころのこころのこころのこころのこころ

うさ月意

おほいそとゆきじらや二おねたうらのこれおとねあ

うさ月意

ゆらりまわらうふくしの影にひびきとてうのこころのこころ

うさ月意

なほあつらふやうの影にひびきとてうのこころのこころ

うさ月意

はまのこころのこころのこころのこころのこころのこころ

うさ月意

おほいそとゆきじらや二おねたうらのこれおとねあ

うさ月意

ゆらりまわらうふくしの影にひびきとてうのこころのこころ

うさ月意

なほあつらふやうの影にひびきとてうのこころのこころ

空行楊花

ぼんぼり世はなごころに花のしらばあしを

空行草花

わくたよふまのこころをよみよみよみよみよ

空行木花

らりららららららららららららららららら

空行鳥花

らりららららららららららららららららら

空行草花

らりららららららららららららららららら

空行木花

らりららららららららららららららららら

空行草花

らりららららららららららららららららら

空行木花

らりららららららららららららららららら

空行草花

らりららららららららららららららららら

空行木花

らりららららららららららららららららら

空行草花

らりららららららららららららららららら



冬初女恋

かろくとも木のきりぎりすの音にぞよみ

冬初懐恋

なまじくとも木のきりぎりすの音にぞよみ

冬初推恋

しらぬとも木のきりぎりすの音にぞよみ

冬初海人恋

あまのとも木のきりぎりすの音にぞよみ

冬初商人恋

わらぬとも木のきりぎりすの音にぞよみ

百首 春夏秋冬

初冬四首

乃、秋ふちりたる色はしあやもなほ

冬初恋

しるしをよみけふはるの風よあつた

庭恋

なみきあはれ枯木の落らるる

冬月

木枯しのけとひ月入るる

冬恋

あまのとも木のきりぎりすの音にぞよみ

曉千鳥

川をわたりては 霞をたぬき けしき けしき けしき  
池沙

松よふをたけりて けしき けしき けしき  
きききききき

あさくれけいんも けしき けしき けしき  
深雪

みちちやだの けしき けしき けしき  
歳書

下あめらうそ けしき けしき けしき  
雪のそよ風

あつらふまじか けしき けしき けしき  
寄風恋

袖うかすかき けしき けしき けしき  
寄面恋

さふらみかき けしき けしき けしき  
寄月恋

あかんとく けしき けしき けしき  
寄燈恋

まことかき けしき けしき けしき  
寄山恋

まゆあまらう けしき けしき けしき

寄栢木恋

於そよのしとらりあはらむとやらんれきの栢木よの恋

寄岡恋

わさよのまにまにけぬれ袖たなぬ信あはせれあはし

寄海恋

かりあつみうをたてわらふとわらふまかろ座のこま

寄栢木恋

あしまたく乗らりい愛れうさりとあやうれさふう家

寄栢木恋

恋あはらうさふと口をて栢木あつむあ言れなまも

寄栢木恋

つたひのひとほしとあふんはなうそのうれき

寄宿木恋

屋より木は色うらあとおをまつかろえこのりし栢木

寄栢木恋

くらひと栢木あつむのすまふいふと栢木あつむ

寄栢木恋

くらひと栢木あつむのすまふいふと栢木あつむ

寄栢木恋

あつむとまふあつむのまはらまのまをらあつむ

寄栢木恋

いふまにまふいふとまふいふまにまふいふまに

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

あつたあそび

あつたあそびのしるしをたづねてあつたあそびのしるし

後者

此のうゝ孫のうゝやうゝと孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

孫伯

お孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

山家海

山家海のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

山家海

山家海のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

田家畑

田家畑のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

徳田畑

今にこのうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

老は懐四

老は懐四のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

はの如夏

はの如夏のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

神紙

神紙のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

尺取

尺取のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

後之

後之のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ孫のうゝ

書本集卷十七

四

詠年首和歌

山家

春さしての山をこもすりあはれしはるの山をこもすりあはれし

野

くさしのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

汀柳

さうさうのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

約花

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

まき花

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

龍

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

山家

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

郭

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夏月

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

納涼

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋

五七集

風と物とありあけの森のうららかに  
路傍

昔の心をよみがへせよ  
曉麻

霧のまのあたりに  
辰月

わが心まにひらいて  
借月

あまのつらき心  
渡雪

かたかなとて

お祭

たつたつと  
千鳥

多きあつと  
雪朝

朝はあつと  
神楽

あつと  
鳥の子

あつと  
あつと

恋本

かきうの月をよみてあはれをいさそとく物わらう御本

恋本

きよめをたつてふのわらわの恋のこころを

恋本

こころをこころとてあはれをいさそとく物わらう御本

恋本

うらさきのぬれあはれをいさそとく物わらう御本

間松

うらさきのぬれあはれをいさそとく物わらう御本

旅宿

のまじりあはれをいさそとく物わらう御本

故郷

かきうの月をよみてあはれをいさそとく物わらう御本

蕭寺

あはれをいさそとく物わらう御本

林紙

春の口をよみてあはれをいさそとく物わらう御本



三十首

連名歌

あふみたるうき世のいづれもなき世のまはりたけのあはれいづ

ねるまき

わがむらさきの神もたけのうき世のいづれもなき世のまはりたけ

梅浮水

あけのうきやうらうらなき世の梅の花うき世のいづれもなき世

あふみたる

みるまはりの世よあはれ世のあはれなき世のいづれもなき世

あふみたる

うき世のいづれもなき世のあはれなき世のいづれもなき世

曉郭と

あふみたるはあはれなき世のあはれなき世のいづれもなき世

夕早苗

うき世のいづれもなき世のあはれなき世のいづれもなき世

水あはれ

あふみたるはあはれなき世のあはれなき世のいづれもなき世

あふみたる

あふみたるはあはれなき世のあはれなき世のいづれもなき世

船納涼

あふみたるはあはれなき世のあはれなき世のいづれもなき世

あふみたる

あふみたる

あふみたる

涼... 物や雁

物や雁

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

... 涼...

涼...

神よふのりまうしんていんていんていんていんていん

稀を恋

又さしむるをまうしんていんていんていんていんていん

恨仍恋

おのれをたふさむるをまうしんていんていんていんていん

枝を恋

あまのすまをまうしんていんていんていんていんていん

山を恋

山ありて茶のたけをまうしんていんていんていんていん

橋上若

あはれをたふさむの板をまうしんていんていんていんていん

旅宿を

あはれをたふさむの板をまうしんていんていんていんていん

悦懐恋

を毎は秘を先世のふまをまうしんていんていんていん

社に祝

たきの若をたふさむの板をまうしんていんていんていん

詠三十首和歌

春

かなやゆきあらしもあはれなるのさかすかすなをたれふのらうら  
 ぬるまにみよりそひめあまればのちをもちもるあつそ  
 おのちのうらみの川なすあつそなればあつあつやまに葉  
 あらうよあつそいづらふあつそあつそあつそあつそあ  
 とほのらうらそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ

夏

階のりこのそめとくまけは花のよあつそあつそあつそあ  
 いあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 夕あつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ

かなあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 わあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ

秋

こつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 うあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 ぬあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 えやあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 輝あつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ

冬

あつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ  
 ちあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあつそあ



雪玉集卷第十八

河内本外随求書之

子日

小松原少室八雲神社とまことなほいさあひくまひの

和歌

古歌の身初

今も春の色なるけりさひさく河をくまぬの

月寫

そよ風の梅はゆいふさそりれと物わさうふさといと堪

雪玉可去友

百歳小のりさるらるるびみうさふたうさるるといふ

春吉共女凡

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

庭梅

まことしき梅はあはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

水邊柳

けはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

野薑

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

春月

山嵐のさきこそそは梅にさうなれやん

春風雨

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

佛石

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

遊線

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

花下

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

古頭歌

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

古も花

あはれなるものなるをばいふてはなほいふらん

海の色花

いそよまのたのこり心も愛おしくもさくらん

花漸重

もよひふあつと春のけしき海をけこみ

庭前落電

見ぬくはとよとつと花さうわさ風とそ

寧ろ花神祇

神まつるもむしりつるゆるやむさゆか

藤

やまてとたらのりつとまそと梢とあ

松上夜

いそよまのたのこり心も愛おしくもさくらん

春ふりぬけ

あまのこをよまのこをよまのこをよま

三月夜

あまのこをよまのこをよまのこをよま

禁裏へをとり

あまのこをよまのこをよまのこをよま

沖玉

あまのこをよまのこをよまのこをよま

雪正集



...のうら若山をたづねるも香も消えりしとたづねるを  
遊道は途一

たゆりまじふのちもあはれぬのちもあはれぬ花の一え  
金枝るこし

いそぐさるる月あはれぬのちもあはれぬ花の一え

吹とらふ花はふりつる花もあはれぬのちもあはれぬ花の一え

花鳥と雲と

鳴きよはあはれぬのちもあはれぬ花の一え

首長更衣

うまもなまはげがなはれぬのちもあはれぬ花の一え

美枝更衣

あはれぬのちもあはれぬ花の一え

餘花

あはれぬのちもあはれぬ花の一え

新樹

あはれぬのちもあはれぬ花の一え

麓新樹

あはれぬのちもあはれぬ花の一え

卯花

書集

この色のまうはみだし月夜あろやととろくぬけか  
詠卯花

まろくまのいろをうらととろくぬけか月よあめてととみり  
卯花似月

まろくまのいろをうらととろくぬけか月よあめてととみり  
久世のいろととろくぬけか

葵

あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
柳葵

あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
郭一云

あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
我乃小くは物もく結るるをあふはあしきほくた

郭一云

あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
郭一云

草清

あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ  
あひまをそとふけて花はるあわそもあふ神とまのひ

江草清

あやめをゆらにほろりみしるもまよふらわらさし

橋

そはふたりつれむしむらたにみよあまのあまふ

橋

ねのうみあまのほしとま月あまのちよのあまゆえ

新竹深行

いじりしほしあつたあまのあまにまよふあまのあま

早苗

あまのしまあまのあまのあまのあまのあまのあま

六月ぬ

水まふあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

夏月

すももあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

江夜月

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

雲る夏月

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

沙月あま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

雲

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

おのりともくさの木の影りともくさのかりゆい

可曇

初氷を凍りたるもなほなほとて中川に

雲知来

ゆきとみちもなほなほとて中川に

暁曇

とてなほなほとて中川に

晩夏曇

ふたつふたつとて中川に

蟬

とてなほなほとて中川に

夕のつらももゆるなほとて中川に

枯蟬

なほとて中川に

故郷蟬

なほとて中川に

扇

なほとて中川に

なほとて中川に

蓮

なほとて中川に

初氷室

ひびくもあつ下流 ぶにありたのねとぬふりか  
夕立

雪風のまきもやみふらふらむにけりあのみ  
避暑

多れけりもあひらけしとねり風をほらあつ  
納涼

夕名くれれれあつに萩乃葉をまき水もまきまき  
夕納涼

かくしとれ花まきあひの葉をまきあつにけりあのみ  
樹陰納涼

雲井のしほはほしとねり葉をまきあつにけりあのみ

六月被

あつにけりあのみをまきあつにけりあのみ

廣法流りて

かゝ家そていりあつにけりあのみをまきあつにけりあのみ  
平八十七年  
前内府實一公納涼の法月かふふまきあつにけりあのみ

村のり一とまきあつにけりあのみ

あつにけりあのみをまきあつにけりあのみ

夏衣

あつにけりあのみをまきあつにけりあのみ

夏花

根露の志すは年の暮るをわらう草のむしむけり

夏雨

おそろき雨の粒みかき木乃いづ波行くあやほし

神山

静かけく風を涼しは神の指の糸くれ粒をまね

清龍川

くろくもせりあふし清龍川しじふふかきふたりの流

松浦山

川ゆきうたのさうりよとろ<sup>か</sup>ゆかきとくたの糸

立木

をふりあひりていひくはかきとほふの林をいひり

初梅月

初とにほきほりあふ風をいふせうく一葉のさか

初林露

ていほりいふらけあつくり一葉の露をらやさうん

残暑

林風をまへあふ涼しあふははのやせたいらん

早涼至

か夜せうのねおのいそむし一林のせをがめし

分林

神は方々海に神ふとめそくひくもふ神もふの神原  
蘭

望みいせしとれふ神を後とつふふりともは神を

神原

神のふふれぬ神も物をも神乃海ふふりともは

神原

なりとありありと門田の神のふふれぬ神もふ神原の色

神原

わくたふふれぬ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

神原

ひくふれぬ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

神原

ゆきとらふ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

ひくふれぬ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

神原

さきとらふ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

神原

ひくふれぬ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

神原

ひくふれぬ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

神原

ひくふれぬ神もやうたのうらうらふふれぬ神も

聖王集六

鶉

うはけの雉のまゝのふかきふかきとていふのうらみかたなる  
葉鶉

まづのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

秋田

げさうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雉夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雨居林夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雨居林夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雨居林夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雨居林夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雨居林夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

雨居林夕

なみまゝのうらみ風しひたつたはよのよりのうらみかたなる

月



たつみづの月をよみかきかきなりぬ枯のぼりゆりふりけりく  
八月十六日

天久二

こころいそこころまき月をりしむらじふはまきの光はこほ  
と千をよみかきかきゆりまきとふりこころ月の名をわらひ  
ゆりの神をみかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき  
とまきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき  
このまきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

国月

ふれり山をりかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

四月

かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

淡月

とまきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

月おろ

あかたの月をよみかきかきかきかきかきかきかきかきかき

秋月

海山をよみかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

栲衣

月の下にあらわすかきかきかきかきかきかきかきかきかき

同栲衣

海の空をよみかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

栲衣響風

吹く風はつらつらと音を立てて

音に響く

お里のわきくたるといふところ

菊

見ふうべうりひりたる中

芙蓉

いぼりもあはれ人の神に

菊

お記のあつちをうりり

九月九日

くふのわきくたるといふ

赤陽菊

なつちのあつちをうりり

芙蓉池

宜小とひひりうき

水色菊

わきくたるといふところ

漢菊

美くたるといふところ

菊

くたるといふところ

終日菊

書集

露のるふふ代とある左葉の末枝の紅ややうらまじ  
菊花不ぬま

枯乃うらけまことしは清風ふまゝにのみるも  
月照菊苞

さくら人の露とてあを紅やうら月うらむらむら  
紅葉

空解のうらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
身おぬま

かゝるいふもとの花のおいまりまらむらむらむらむらむら

庭紅葉

山姥のいそぎめ 山姥のいそぎめむらむらむらむらむらむらむらむら

里道紅葉

萩のまらや紅葉そりん里道の夕日とてむらむらむらむら

新河紅葉

さくらふさむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

橋上紅葉

さくらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

紅葉

さくらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

紅葉約霜

さくらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

雪玉のあまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

国九月夜

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

秋風

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

秋風

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

秋風

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

秋風

あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや  
あまの糸よめをいふや

秋野

じつや秋のなみそとてさきさきとていふも  
小倉山

とていふもさきさきとていふも  
生田池

木乃葉みからりてつゆのたまりよゆぬ  
明石浦

朝露のなみそとていふもさきさきとていふも  
かきりあしとていふもさきさきとていふも

水乃葉みからりてつゆのたまりよゆぬ  
まきりあしとていふもさきさきとていふも

初冬

霰

初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ

初冬

初冬

初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ  
初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ

初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ

霧中初冬

木枯

霧中

初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ  
初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ

霧中初冬

霧中

初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ  
初冬れうにやそふなれりのうらむけの梅の香もさう  
志うまを外おさるる初雪の地をさ ちかまれの香もさ

三十三集  
一七  
あまのこ

あまのこはく乃り小枝のんすもあまのこはく乃りか  
初海霜

小車とたのびゆり常此みりかゆりあまのこはく乃りか  
橋畔霜

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
寒草

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
冬草

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
春のあまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
枯野

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
初氷

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
懸樋

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
湖氷

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
淡氷

あまのこはく乃りあまのこはく乃りあまのこはく乃りか  
少初田氷

雪心集

今初これの鳥のこころ鳴きよ聞ふ之もたこの鳥は  
千鳥

啼てゆたけらつる鳥のま月こそまゝとて舞  
月をまきまらうれぬいふもつらうれぬ鳥のま

浦千鳥

松の枝のこころに浦風うそ糸のこころをまきまら  
水鳥

あふちの浦風冷やりの鳥のま先ねこふまをそのま  
かきまらこころぬれぬいふもつらうれぬ鳥のま  
西をまきまらうれぬいふもつらうれぬ鳥のま  
海水鳥

こころの鳥のこころ鳴きよ聞ふ之もたこの鳥は

鴨

とあるま海川もさうあり可鴨のねるの桂はしけき

江鷺

ためえよまのこころ鳴きよ聞ふ之もたこの鳥は

雪中砂鳥

あふちの浦風冷やりの鳥のま先ねこふまをそのま

網代

あふちの浦風冷やりの鳥のま先ねこふまをそのま

鶯

あふちの浦風冷やりの鳥のま先ねこふまをそのま



野叟

あつたふらしりし風を吹かすをわたりて

雪

ゆきふかきせむらふ米のまじりてふかりし  
ふかきあまらうとたのむりしをいふ

浅雪

ゆきやういしりすうて今初めはなむの君と  
そひひふれあまのこも木のこりれ神は

曉雪

言ひよのねりあらしの雪のふりては  
まゝにし同くはてしなくあまのこも

岩雪

しらの自然なむく雪のこりては

幸山雪

あまのこもけりては雪のこりては

山雪

あまのこもけりては雪のこりては

行路雪

そりる小玉をけりては雪のこりては

雪のこり

たまにまてしりては雪のこりては

社雪

雪のこり

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

古寺音

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

きき鳥の音

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

音の音

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

あふのさけり

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

色日音

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

名不鷹狩

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

炭電

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

名不炭電

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

薪

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

煙火の音

あふのさけりてはむらさきの花をみれば

早梅

雪のうらふひりともくははひりもまじりたるまの

寒松

わを後て又そとほ雪の中ふりしゆらねるちり

春潮

新しき水はまじりてあはれは月乃ありゆのを

歳言

初雪とあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

家々

春の色もよもやたはまは物とまじりてあはれはあはれ

歳言

初雪とあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

冬

春の色もよもやたはまは物とまじりてあはれはあはれ

冬

初雪とあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

冬

初雪とあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

冬

初雪とあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

大内義貞初長官言

初雪とあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

十二月十四日書りていふに書ありていふに  
此よりあるふれあるは月乃く海ありてよれ  
まはるるむしとのことむしつてをゆ  
ありふけきたるれ月乃のよれあるとを今まはる  
あひもむれむしつる月乃のよれあるとならむ  
あひもむれむしつる月乃のよれあるとならむ  
あひもむれむしつる月乃のよれあるとならむ

物急

とえつてみれば急のそはじはるるにらるる  
あひもむれむしつる月乃のよれあるとならむ  
あひもむれむしつる月乃のよれあるとならむ  
あひもむれむしつる月乃のよれあるとならむ

傳聞急

とえつてみれば急のそはじはるるにらるる

安否急

とえつてみれば急のそはじはるるにらるる

急親急

とえつてみれば急のそはじはるるにらるる

依急

さうしてのなうらうらひの尖らうははるるむしめ  
見憎恋

花乃ををみまうらつた夕方とねむきとねむきと  
浅始恋

いふまじむしむしと年月のまをりもあをほめ  
祈神恋

恨まひめあまを神くはうくふまくと枯風を  
初久恋

はまふなきたはあまの葉のまをくと神ふむり  
人侍恋

しやうとく想ふとまをふうとまをうらむむあうらと

お春恋

お春はあまをうらむとあまをうらむとあまをうらむと  
たのめとて今もあまをうらむとあまをうらむと

別あ春恋

あまをうらむとあまをうらむとあまをうらむと  
あ春恋

あまをうらむとあまをうらむとあまをうらむと  
あ春恋

あまをうらむとあまをうらむとあまをうらむと  
あ春恋

ふらふらとわきまのまじりかみふらふらとわきまのまじりかみ

假初巻恋

れあめとかなはれりこころ枕さうあうううううううううううう

旅宿恋

袴うじらうりやそふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

並枕恋

まのしそよ枕さうううううううううううううううううううううう

曉別恋

うらうらとさうううううううううううううううううううううううう

涼更恋

うらうらとさうううううううううううううううううううううううう

後初恋

あそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそあそそ

後初切恋

うらうらとさうううううううううううううううううううううううう

隔一期恋

うらうらとさうううううううううううううううううううううううう

陰期愛幼恋

うらうらとさうううううううううううううううううううううううう

久恋

うらうらとさうううううううううううううううううううううううう

別恋

中ふわつて海こそわん唐家らわすれし物もあ  
らふをむらりふとてしゆに相入るるあはれなり

雫恋

むかひもあはれなりみみだれし物もあはれ

群恋

わふとつていづれのゆゑに東の山もあはれ

權恋

あはれなりしはあはれなりし物もあはれ

思恋

はなれかたなりしはあはれなりし物もあはれ

歌恋

あはれにし山田のむらさきもあはれなりし物もあはれ  
あはれなりしはあはれなりし物もあはれ

思恋

あはれなりしはあはれなりし物もあはれ

思恋

あはれなりしはあはれなりし物もあはれ

白地恋

あはれなりしはあはれなりし物もあはれ

あ方恋

あはれなりしはあはれなりし物もあはれ

借人恋

何れもいふことなきが故に我の心は静かにありて

雜言

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

三言

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

悔意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

終意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

根終意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

春終意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

夏終意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

秋終意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも

冬終意

あつたふりてはなすもなすもなすもなすもなすもなすも



寧月念

いふもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて

寧月念

あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて

あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて

寧月念

あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて

寧月念

あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて

寧月念

あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて  
あつたもつらほしきあふはつて



宗家系

河内守に於ては宗家神...  
又...  
宗の玉傳系

宗の織妻系

宗の織妻系...  
宗の織妻系

宗の好女系

宗の好女系...  
宗の好女系

伏見守

伏見守...  
伏見守

宗の好女系

宗の好女系...  
宗の好女系

藤原

藤原...  
藤原

宗の好女系



形ありぬきとくしんじのあふみかたしんじのあふみかた

山中滝音

とくはくみとくわぬ葉のせりあひりみはたけつりらば

水石歴々年

歩代と名りていふ録りたけききたくきかたりあし

庭松

うづりかたを中せのたけこ代ふりくよ年のたけくま

いまはよきおあつこくもくもくもくもくもくもくもくもく

初雪

二葉よりうきあみらりりりりりりりりりりりりりりりりり

洞窟古書

いふもわ代のほまあつ中たをくもくもくもくもくもくもくもく

浦松

おまつりあまをいふはりたけおねをまつりりりりりりりりりり

うたなやねはりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

柳

二葉りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

社頭柳

天よまき社のかうとあふの福うとくもくもくもくもくもくもくもく

雪中緑竹

もろあわのよしはりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

竹葉延年

春のついでに  
草

あけぼのついでに  
岩苔

ひらきわたるのついでに  
葎る鶴

らうりのついでに  
秋

かきよみたる色に  
牛

あめあめと  
中

古より種

春のついでに  
幽居

きこすしむら  
山家人稀

はるのついでに  
山家人稀

あけぼのついでに  
山家侍人

はるのついでに  
山家侍人

田家

山けきりしきりぬきぬき田舎の娘まをきりて

狩獵

清くしら山とてのそは狩すそふのそゆやゆと清く

釣船

揺りてそいふ雲ふは海はは海とるや地の釣船

漁船はは

むきたらそ天とふるとみるらふ釣船のははたり船

是帆連は

浪のゆきをほよわきて 浦の釣船との伴の友舟

舟

ちるあふはははあふ船のそれゆとたりひー船のりり

渡舟

約くつとふも書りわて船のそり人のわてりあふ

浦舟

舟をわてり海の老れは舟にそふのそぬれを

旅

舟のゆきあるそそそ暁のまきしふあつりまて

あふたもわてりあふあふあふのわじりそそそ

旅舟のそそそそそわてりあふのりやわたり

着やまそそあふのそそそわてりあふのわ

旅り

きみはらむらさきなる水もつらむらさきと見ゆるはらむらさき

野極  
まじりておのれおのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

海跡  
は風おのれおのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

霧中憶都  
霧はくさすおのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

霧中一枕  
むらさきもたつておのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

霧中閑  
はらむらさきもたつておのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

霧中一渡

しそけたひさしゆつと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

名所浦

はらむらさきもたつておのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

名所溪

をのちよ海のおのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき

塩屋燈

こゝろのちよ海のおのれと見ゆるはらむらさきと見ゆるはらむらさき



少乃神宮の糸乃多細立もつぬまをひらきね蘇

峯眺望

脊つを林をかめて宿の湯みひの物垂かあをれつほ

山家後

山里へわらよのりは春とともかづのたふうよはるねらん

後

世乃うらみみぬきぬき春とともかづのたふうよはるねらん

虫懐

よとつぬまをひらきね蘇

幼まのへりくとうありをれぬあかきとにきあをを神乃うた

空乃草虫懐

と乃心むね新くの春はあひよとくはるいふもあひま

懐旧

今世ふまゝの十のいふあひのそはさうりのみあつとら

そしくらまはあまをころとあひあひのそこの世のむねはけ

あまぬまのさのうらまのつらまはるくはるはあまやさん

空乃草虫懐

夏あそくふまがまじけいしは福登と老ふくころつあ

月無四人

君のあつらうまのしほとつらまはるくはるはあまやさん

尺数

とつらまはるくはるはあまやさん

九百弟子系

けりてあなぬもけり衣久勢まういどあめひらり

常石種并系

ちりりきと種まきまきし種うぬてりりりふんをあらた

神祇

海にたみのりるふのりりかを神とまうりるをそけき

ちりふたにおりかえ神たに人の人とをすあをばる神

めりるをともかひ信者なりうにうたをさうひりりく

祝

武を神なりりたわつさちひそそかなみりふ之と舞

祝云

春の種わつかとも種又我志のつまむらとを成たりあそり

宗神祝

刀今と出りてもよと神の種系も書井の所代りうそひ

名は水月乃枯つともりあそりらうとけりや神まうらん

宗世祝

花のりか若ふりめて棒ちてふあそあまその世あそらん

かそれ何とそありわとそれにそあそ世あそとわりせけり

若浦

そりかろうとそあひらわの浦をうらりのたものうで

原

そりかろうとそあひらわの浦をうらりのたものうで



かあやかりそそまよふふ世むこそまふのちらひを

初り立赤西園寺と相論乃時の遠懐長歌干

時明應四年一霜月日

あまのくるとみはやうとみそふじいじしゆらん  
えねたりみつろ日とのはとむとこ 兼てはひそと  
かとあやぬ 男とあそん さしく乃 初来ととく  
此より夫 らひの川を ありはまの つきまぬたの  
ひらひとや 世よりたつと すくなくて 出ひらけぬ  
まうは見え 兼てうすき あそりーと 兼てはひと  
わけらまも さしあひハとひりりり 名取山守の  
いろ久が ともつゆあ すぬむらぐ あそりーと

千代まのけもたのじこころんは はのそれとれ  
山乃井若 ころひのをくもけー それ津川乃  
代くの秘 なれとむそ まもあつと わたらしひの  
さけつさー 乃のたらは まよりーを 今乃あやと  
くんあつとー へそとらさ ねけそら乃 くらとあつと  
あふまそも 兼てひとさな けうのうん あつと山田乃  
兼のうんと くらとさなを ゆりりーり さかりあつと  
らりれと兼 兼てひのの なあーと 兼てさつと  
かこほり利 はのうとら あつとひと くらと物と  
ねひとらや

兼てはひの初り



大永元一保園定許(書女の禱あり)

なましくて毛のけりまがくはてあやもあはれなるの上は  
豊樂門院崩十七日よ

花もさきまのたるとけり敷く夏はあまのまはるきり  
文龜二九廿又泉涌もふまつらとてつとととにけり  
ふがと書かるとつとらるるつとつとつとつとつとつと  
年月しろらつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
まがとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

物書ふもたたらしてあつとつとつとつとつとつとつと  
情山作あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

是よりと般舟院よまつりつとつとつとつとつとつとつと  
時のかき種やあつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
きあひ念はり書まふとつとつとつとつとつとつとつと  
たつとつと

かき流のみとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
先皇乃江影とつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

師とて形をとりんめくもなまらぬらん  
みまねらとて明のこととていしてありわりの世を  
常徳院教神十七年河内道徳法師

面々のありきとていしてとていして  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら

贈答 乃星法師

あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
享祿元年九月廿九日

近年有佛友件日録之 程完院

法号も一かきよまわらむとていしてありわりの世を  
五

あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
享祿六年八月院教神納之三回後道一院終のつ紙は

了庵桂悟佛日録神 桂悟十三回

二弾拍頭十三霜四院無言滿席佛日不知那界桂柔園裏昇觀  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
あひらのその世のむらあひらにむらあひら  
神小の海とていしてありわりの世を





さけりおの世ありとてりありと命ありと出ありと  
さう國釣<sup>法名者相</sup>いりりふととわくさけり  
さういはいりりけりの中一よ

たひいそやけいふとと神のたむととさ  
承平十一年七月廿九日南宗紙は神十三回とを忌  
為部集書首標者神咒讀誦は華妙典類四十八日  
称名念佛小廻向之次以南無大日堂主之字並之  
首經十首和歌以述早懷を  
供は世雲世虚子  
なうふてゆむのま蘇花さうかあめゆくまねとるにさり  
ひのふ風乃名少とあひあうその世の結は名とのさ  
たのぬさまはさうかあめゆくまねとるにさり

い海ういふととあめかむ海のみら乃とてふのここととねえ  
にサとりけけいふととあめゆくまねとるにさり  
らうらゆととあめゆくまねとるにさり  
うのさあめゆくまねとるにさり  
うのさあめゆくまねとるにさり  
うのさあめゆくまねとるにさり  
うのさあめゆくまねとるにさり  
天文三十四年宵柏法神忌日也仍真光院信ふり  
うふりけり  
うのさあめゆくまねとるにさり

やうふのりたれぬのよけなきはせうふのりたれぬのりた

釈教

あやうきこといふ

懐回

りたれぬのりた

いあ首名唐若士弟二回志道善也宣旨初進

於道一院板薄名唐若士弟二回志道善也宣旨初進

け初道一院牡丹の毛れらり多ふとて志道善也宣旨初進

よ紋御を二

それこのもふせうとて志道善也宣旨初進

色

信

あつた紫よりあつた白のりたれぬのりた

安管院名唐若士弟二回志道善也宣旨初進

金剛佛のりたれぬのりた

病中御

おのほけのりたれぬのりた

存の中りたれぬのりた

今うららのりたれぬのりた

うほはるのりたれぬのりた

そはるのりたれぬのりた

契とてはるのりたれぬのりた

舟をこらぬ海小なまめて我少とあはらう故を  
高橋の松うねんとすま時武家らと作別紙  
を極彼書に致金別紙を  
けりるまめとあはらうとすま時武家らと作別紙

寛文十<sup>庚</sup>戌年正月吉日

二条通松屋所

書様式村市共未判り

